



Lambretta T-Shirt

ホワイトでプリントされたLambrettaの車体と、ブランドロゴがほどこされたシンプルな1枚。全6色展開でSサイズからXLサイズまで展開している。
価格：3900円/間C

Lambretta Oil Lighter

Lambrettaのポスターをあしらったオリジナルオイルライター。表裏にはそれぞれ異なる種類のビジュアルと、Lambrettaのロゴがプリント。Modsスタイルに欠かせない、紙巻きたばこのお供に。全6種。
価格：1200円/間C



Lambretta Para Code Key Holder

何かと重宝するカラビナが付いたパラコードキーホルダー。キーリングにはLambrettaのブランドロゴ入りのキャンバスラベル。仲間内のちょっとしたプレゼントにも喜ばれそうなアイテム。3色展開。
価格：1000円/間C



Lambretta Sidecover Key Holder

Lambrettaのサイドカバーをモチーフにしたキーホルダー。クラシックなカラーが可愛い同アイテムは、全部で3色展開。さらに付属のボックスにLambrettaのイラストが描かれており、ボックスと共に飾っても良さそうだ。
価格：1500円/間C

WELLER

IRON SCOOTERS ONLY

VESPA
LAMBRETTA
RABBIT

鉄スクーター至上主義



狂喜乱舞

SPECIAL EDITION OF
ROLLER

Heritage Style New Models

歴史あるプロダクトを現代的手法で再構築する「ヘリテージ」
近年のシーンを象徴する大きな波はスクーターにも押し寄せている
ここでは現代に生きる3ブランドの代表的モデルを紹介しよう。

photographs: Kentaro Yamada text: Ryo Tsuchiyama, Takashi Morimoto (P112-116, 118-121)

Lambretta V50 Special

ランプレッタ V50スペシャル

名門ブランドが再びストリートへ
本家Lambretta、ついに復活!

Lambrettaがスクーターの生産をストップしたのは1971年のこと。
それから約半世紀の月日が流れた2017年、創業家イノチェンティは
世界中に散った商標を含む幾多のアイデンティティを自らの元へ集結。
創業家の手によって、イタリアの名門ブランドが復活を果たしたのだ。

special thanks: SYGN HOUSE <https://sygnhouse.jp>



ひと目でそれとわかる
端正なスタイリング
在りし日の姿が蘇った。

2017年のミラノショーで華々しくモーターサイクルの世界に戻ってきたLambretta。かつて世界中で愛された名門ブランドは、金目当ての第三者が名前だけを拝借して復活したわけではない。ブランドを創業したイノチェンティ家の手によって復活を果たしたのだ。

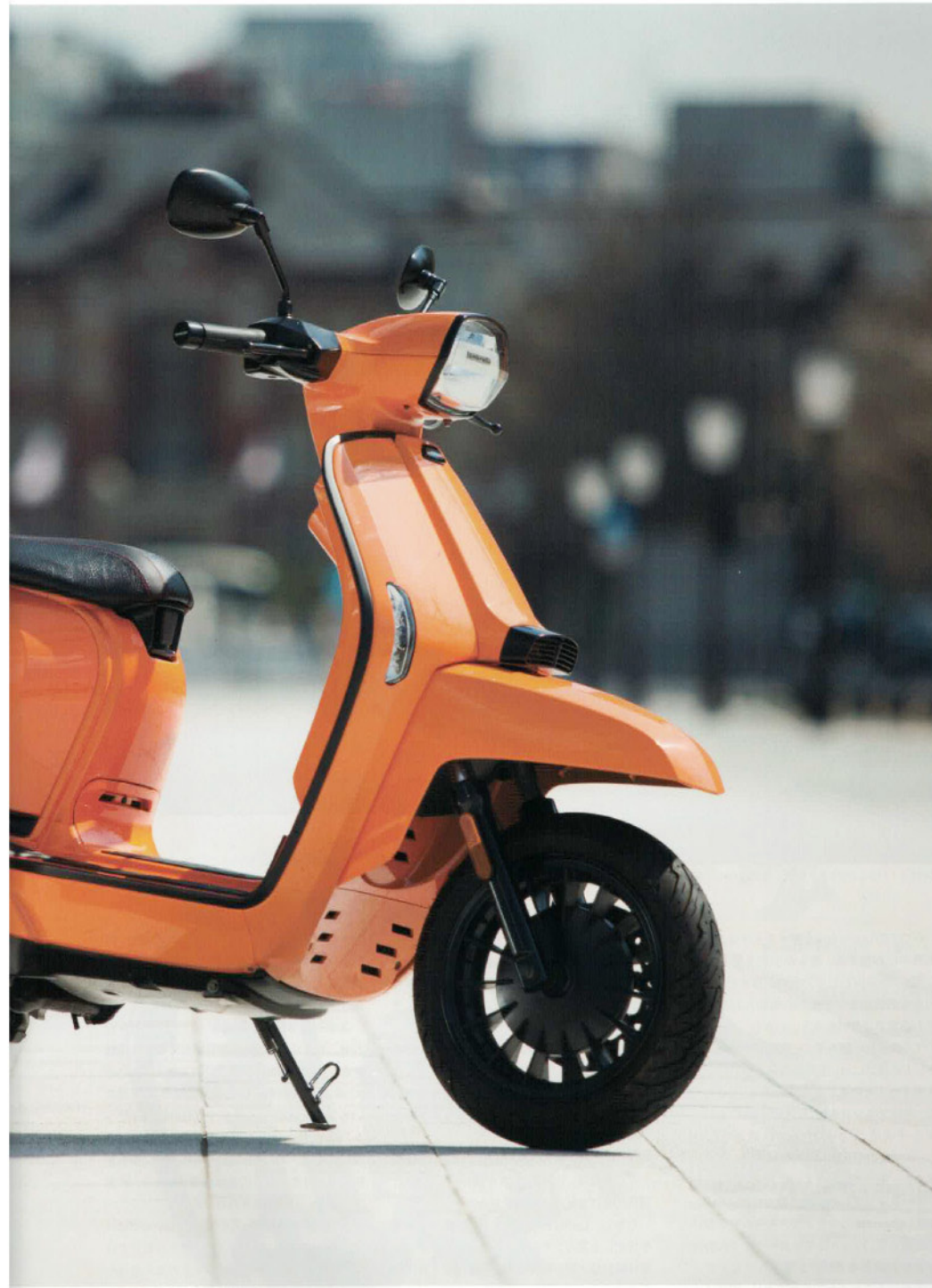
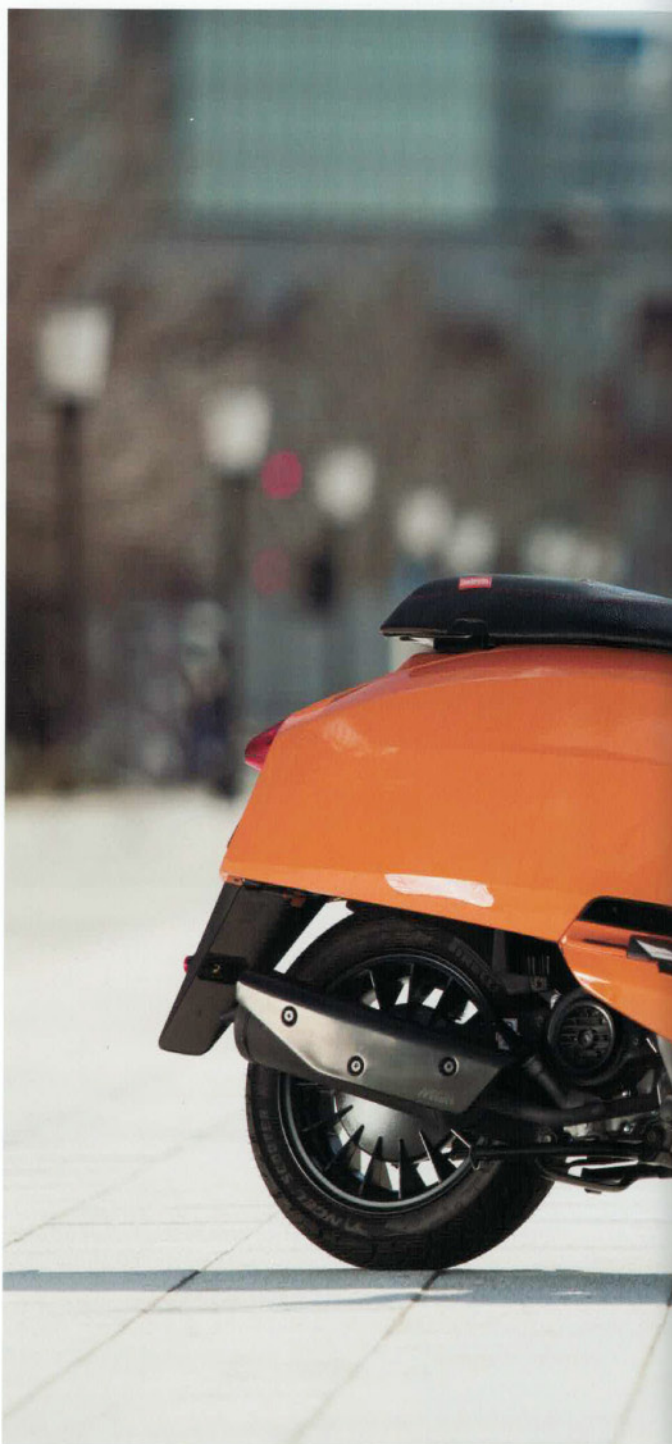
約半世紀の時を経てストリートに戻ってきたLambrettaは、往時の佇まいを現代風にアップデートしつつ、環境規制への対応や現在のモーターサイクルマーケットのニーズをしっかりと捉えたプロダクツとして、ブランド復興から間もなく世界中で販売されるようになった。

今回撮影のために借り出した車両は、50ccモデルのV50 Specialだ。50ccにしては大柄に見えるが、それもそのはず、現行Lambrettaはシャーシやボディなど基本コンポーネンツを共用した設計としており、エンジンや足回りの変更だけでV50 Special、125 Special、200 Special、3機種を用意している。そしてそのどれもが、往年のLambrettaを彷彿とさせる魅力的な造形を楽しめるデザインで作り上げられているのだ。

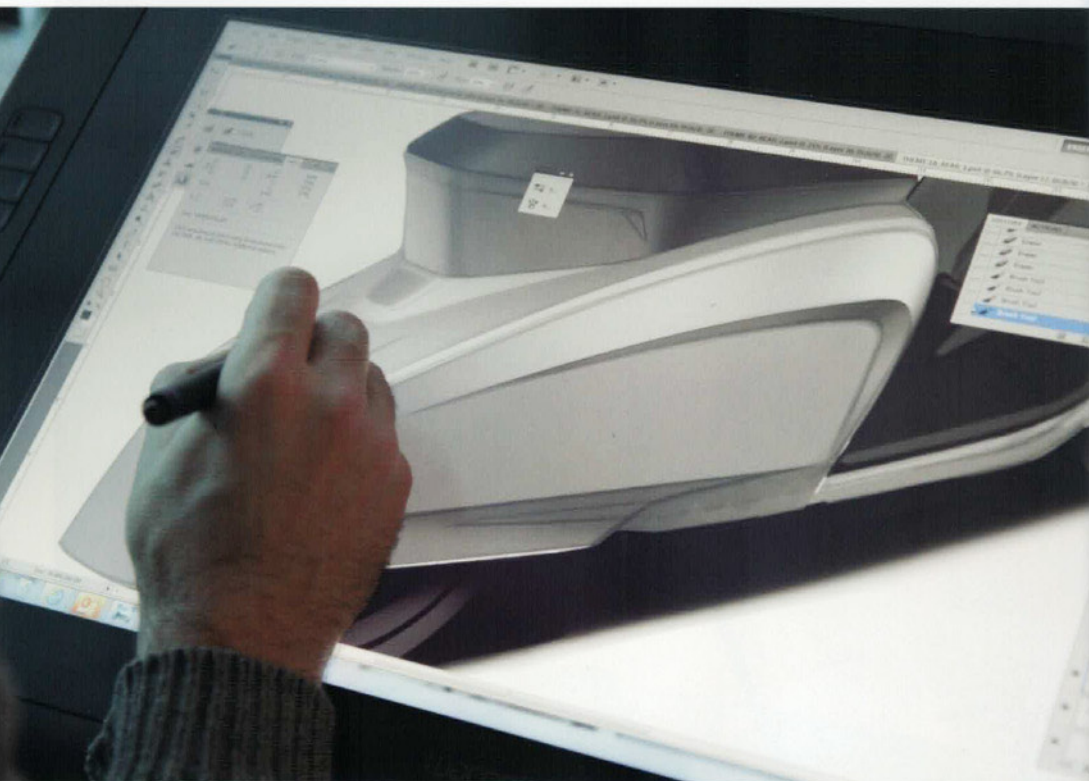
角形の異形ヘッドライト、直線的なラインで構成されたフロントパネルやフェンダー、リアパネルに至るまで、かつてのLambrettaを知る人ならば誰もが、そのスタイリングに過去の名車たちの面影を自然に重ねられるだろう。

新生シリーズに搭載されるエンジンはすべて空冷4ストローク単気筒で、環境規制にも対応済み。気になるその乗り味だが、50ccではやや非力さも感じるものの、車体がエンジンに勝るパッケージは理想的だ。他社の50cc専用設計モデル、ストリートでの安定感・安心感はワンランク上の領域にある。もちろん、V125 Special/V200 Specialとなれば、車体とエンジンのマッチングは素晴らしい、殺伐としたストリートでも意のままに走ることができる。かつてのLambrettaにあった走りを楽しめる資質は、この現代版にもしっかりと継承されているのだ。

50ccとしてみれば大柄なV50 Special。全体的なボディラインは旧Lambretta最終シリーズを踏襲しているようにも見える。また、V125 Specialはリアディスクブレーキ、V200 SpecialはABSディスクブレーキやツインサスペンションと装備が異なる。



ブランド復活にあたって重要視したのはやはりデザインだった。



このサイドパネルだけを見ても、ひと目でLambrettaとわかる。かつてのデザインがいかに独創的だったかを再認識させられる。

かつてのLambrettaを愛する人々はいまでも世界中に存在する。彼らが旧型を愛する理由は、スクーターとしての走りの良さと、存在感のある個性的なデザインに集約されると言っても過言ではないだろう。しかし、モーターサイクルの世界に限らず、一度歴史が途絶えたブランドの復活には、必ずと言って良いほど旧型を愛する人々の厳しい視線が注がれる。もちろん、今回ブランドを復興させたイノチェンティ家もそんなことは織り込み済みで、新生Lambrettaのデザインには世界最高レベルのデザイナー集団が関わっている。

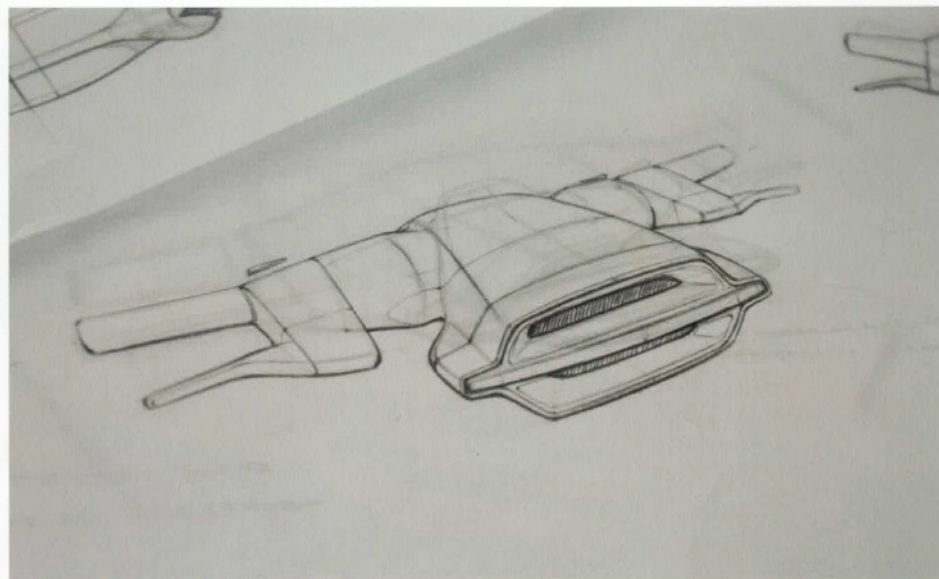
オーストリアに本拠地を置くKISKA Design。新生Lambrettaのデザインスキームを手がけたのは彼らだ。KISKAはモーターサイクルの世界ではひと癖あるアヴァンギャルドなデザインを手がけることで知られており、現在はオー

ストリアのモーターサイクルブランドKTMや、スウェーデンの老舗Husqvarna（現在はKTM傘下）のデザイン全般を担当、これまで数多くの刺激的なデザインを発表してきた。また、それだけではなく、ドイツの光学機器メーカーZeiss、同じくドイツのヘルメットブランドのSchuberth、イタリアのサイクルパーツブランドのMaguraなど、名だたる企業の商品デザインも担当。インダストリアルデザインの世界で優れた手腕を発揮してきた。今回ブランド復活の大プロジェクトを請け負った彼らは専門チームを結成。往年のDNAを強く残しながら、現代的なスタイルを完成させた。

しかし、Lambrettaブランドの分断はおおよそ半世紀にも及ぶ。その間にモーターサイクルの車体設計は大幅に進化した。普通に考えれば外装を中心としたデザインだけをオマージュし

ても似て非なるものになってしまうのだが、新生Lambrettaはそれを感じさせない佇まいを実現している。そこにはLambretta特有の事情があった。

スチールフレームにボディパネルを組み合わせて、エンジンと駆動系は分割して車体に搭載する—これはいまでは当たり前となったスクーターの基本的な車体構成だが、このシステムをいち早く実現したのがじつはLambrettaだった。新生Lambrettaも車体設計の時点からこの構成を踏襲。スチールフレームにプレス鋼板を組み合わせたのがその基本構造だ。そう、新生Lambrettaもまた、まぎれもないアイアンスクーター、つまり鉄スクッドだったのである。Lambrettaはブランドは復活に当たって、デザインだけではなく、自らのアイデンティティそのものだった車体構成までも再び現代に蘇らせたのである。



デジタル技術全盛の現代であっても、デザイナーたちは手描きのラフスケッチの重要性を認識している。新生Lambrettaの顔とも言える角形異形ヘッドライトもかつての面影を残しながら巧みにデザインされている。



車体中心にスチールパイプを置き、そこにプレス鋼板パネルをレイアウトする車体設計は、かつてのモデル同様だ。現代のスクーターの礎を築いたブランドは、「鉄スクーター」として現代に蘇ったのだ。



直線基礎のボディラインは現代には新鮮だ。灯火類はすべてLEDを採用。さらにフロントパネル裏にはUSBチャージャーを備えるなど現代的設備もしっかり盛り込まれている。V50 Specialのエンジンは最高出力2.6kW/7,500rpm、最大トルク3.4Nm・6,500rpmを発生する。車両価格は38万円。



Heritage Style
New Models

Lambretta Model Line-up

共通のボディで3つの排気量を揃えるため、所有免許や保険、税金など事情に合わせて好みのモデルをチョイスできる。前述のように車体はすべて共通であり、どのモデルを選んでもLambrettaの世界観を満喫できるのも特筆すべきポイントなのだ。

フェンダーの形状や排気量によって色の設定が異なるLambrettaはBLACK・BLUE・WHITE・SILVER・BLUE・MATT GRAY・BROWN・RED・ORANGEの全8色展開。豊富なカラバリも大きな魅力だ。

V125 Special

シリーズ中核125ccモデルの最高出力は7.5kWで国産モデルとも遜色ない。現行全モデルではフロントフェンダーを車体にマウントする「Fix Fender」と、フォークにマウントする「Flex Fender」の2種類を用意。写真は「Flex Fender」仕様だ。

車体価格:40万円

V125 Special
“RED”



V200 Special

最高峰モデルは排気量168.9ccで最高出力8.9kW（12.1ps）、最大トルク12.5Nm（1.2kgf）をマークし、高速道路でもゆとり走りを楽しめる。200ccクラスと考えれば車体は非常にコンパクトで流滞の激しい都市エリアでも高い機動性を発揮する。

車体価格:45万円

V200 Special
“ORANGE”



ベタベタな男たちへ
常熱体質な男たちへ

表紙 東方神起／私の最愛酒



Vol. 14

長瀬智也

Be Stupid.

多趣味でアメリカ好きな男、長瀬智也が監修し、
今気になるモノ・コト・ヒトを紹介する連載。
そこに長瀬流の“ラグジュアリー”と
“ストリート”の邂逅が見えるのだ。

今月のお題

プレミアム・ミドルスクーター

Tomoya Nagase

1979年神奈川県生まれ。'94年、TOKIO
のボーカリストとしてCDデビュー。
以来、音楽活動をはじめ、バラエテ
ィやドラマ、映画など、幅広い分野
で活躍。TOKIOとして、東京2020オリ
ンピック・パラリンピック フラッグ
ツアー、のスペシャルアンバサダー
を務めている。

シャツ¥21,000、パンツ¥16,000（とも
にネイバーフッド/ネイバーフッド
原宿☎03-3401-1201）その他私物

「トレンチコートを着て乗るのも似合う
でもLAスタイルで乗るのも似合う」

試乗したのは「V200 Special」。ラ
インナップにある90ccも125ccも
200ccもサイズ（長さ1890×幅735
×高さ1115mm）はすべて同じ。



1「200ccなら高速道路でも乗れるから、足としてじゃなく本気で乗ってもいい。作り
や走行性にバイク好きが作ったんだというストイックさ。トレンチコートを着て
乗るのもカッコいいけど、LAスタイルで乗るのも似合う」と長瀬さん。2カラーはホ
ワイトのほか、ブラックやレッドなど、全10色をラインナップ。



「今、イタリア生まれのスク
ーター、ランプレッタが
気になっています。なんていっ
ても名前が最高。由来は工場が
あった場所がミラノの郊外、ラ
ンブラーテ。という街にあった
から。東京に工場あるからトー
キョーって名前にしようぜ、み
たいなノリ。最初は自動車メー
カーが作っていたけど、194
7年にバイクメーカーとして独
立。イタリアではランプレッタ
のライダーをランプレッタス
タと呼ぶそう。そして、誰でも
手軽に乗れて、走りのパフォー
マンスもある」をテーマに作ら
れたとか。民間人のために……、
なんて優しいんですよ。イタリ
アの男は優しいんですよ。ええ。
だからモテるんでしょうねえ。
それで、最初のうちは盛り上が
るんだけど、世のながオート
バイから自動車にシフトしたこ
とにより71年に生産が終了する
わけです。しかし2017年に
『Vシリーズ』で復活して18年
は日本にも上陸。現代のモノに
は超えられない魅力があるから
復活したのでしょうね。

悪くも独自デザインが生まれま
す。しかもVシリーズにも採用
されているようなスチールモノ
コックはめちゃくちゃ軽くて頑
強。さらに、メーターはデジタ
ルで見やすくデザインもいい。
ディスクブレーキだけれど、ク
ラシカルにドラムブレーキ風に
デザインされています。メット
インや気の利いたフック、鍵に
までデザインは行き届いていま
す。当時のホイールより大径の
12インチになり軽快な走りも実
現。オフショパンパーツもいろ
いろあるのですが、ノーマルの
まま技術者やデザイナーの想い
を凝らしたのでステッカーチ
ューンがいいかも。

⑥

そんなランプレッタ「V200
Special」が38万円、「V200 Special」が
40万円、「V200 Special」が45万円
という破格プライス。ディーラ
ーはないのでこのバイク屋さ
んでも販売してくれる。少しし
か利益の出ないモノはやらない
ビジネスばかりのこの時代、ま
ランプレッタはやってこれまし
た。それに名門をこまめに守っ
てきてくれたファンたちには感
謝です。彼らがいなかったら僕
が今のランプレッタに跨がるこ
とはなかったですからね。とに
かくカッコいい、でも買う前に
イタリアの男に抱かれてーわ
（笑）。

別冊付録が2つ付いた秋のスペシャル特大号!

令和元年10月1日発行
(毎月1日発行)
昭和28年11月24日
第三種郵便物認可
第55号 第16号

続報SCOOP!!



HONDA
CRF1100L
アフリカツイン

今年の国産バイク
ナンバー1が決定!

ジャパン
バイク・オブ
ザ・イヤー
2019

AUTOBY
10
2019



別冊付録①

RIDE
デカい
あいつと
何処までも

別冊付録②

**国産車
総図鑑**
[最新版]
2019-2020



#パパツ-

「パパと楽しむツーリング」略して「#パパツ-」！バイク王イメージキャラクターのつるの剛士さんが「バイクは親子で一緒に楽しむものでしょー！」という強い思いに、バイク王さんが共感！それじゃあ、この考え方や活動を広げていこー！と、一緒に頑張ってガンバっている活動を象徴するキーワードなんだよ！



#パパツ- スペシャルWEBムービーが公開中！

8月19日（バイクの日！）には、「#パパツ-」をより多くの人に伝えるため、つるの剛士さん出演のスペシャル WEB 動画を公開！同時に、豪華賞品が当たる「#パパツ-」キャンペーンもTwitterでスタート！

バイク王のイメージキャラクターとしてすっかり定着した感がある、つるの剛士さん。プライベートでは、趣味から子供の送り迎えまで、日々の生活にバイクを欠かすことがない、根っからのバイク乗り。

そんなつるのさんが自分の経験からバイクは親子で楽しむもの。子育て世代の親たち、そして、その子もまたにも、バイクに触れる機会を作ってもっと楽しさを知ってもらいたい。そして、その子どもたちが親になった時には、世代を超えてバイクの魅力を伝えて欲しいという思いから「#パパツ-」プロジェクトをスタート。

つるのさんの想いに共感し、一緒に普及活動に取り組むバイク王では、その取り組みを少しでも多くの人に伝えようということで、つるのさん本人が出演するスペシャルWEB動画を公開。同時に、豪華賞品が当たる「#パパツ-」キャンペーンをTwitterでスタートさせた。

さらに、「イメージ」だけでなく「リアル体験」も必要だと、「#パパツ-」イベントを開催することが決定。つるのさんは、子育て世代のパパと、子どもたちにもっとバイクと触れ合ってもらいたい、積極的に楽しさを共有してほしいと、熱く語る。イベントは気候の良い10月開催で、親子での参加が必須とのこと。楽しい1日になることは間違いない！

#パパツ-キャンペーン&つるのさんとのキャンプもあるよ！

つるの剛士さんと日帰りキャンプ！



【つるの剛士参加！ #パパツ-日帰りキャンプ】

日時 2019年10月20日（日）10:00～予定
場所 神奈川県・相模湖周辺某所 集合（当選者のみ後日連絡）
定員 10組20名様（親子での参加必須）
内容 #パパツ-安全講習ワークショップ・つるの剛士さんと相模湖周辺ツーリング・参加者全員でBBQなどなど、お楽しみ盛りだくさん！

詳しい内容や申込方法などは「Bike Life Lab」で確認を！

#パパツ-キャンペーン 抽選で豪華賞品をプレゼント！

応募方法は、バイク王公式 Twitter アカウント (@bikelifelab) をフォローして、バイク王公式 Twitter アカウントが発信する対象のキャンペーン投稿を期間中にリツイートするだけ！ 当選者には当選通知が Twitter の DM で届きます。

キャンペーン期間

23:59
まで

2019年8月19日（月）10:00～9月23日（月）

詳しくはバイク王公式サイトのTwitterキャンペーンの紹介ページで！
https://www.b190.jp/twitter_cp/twitter20190819/



B+COM SB6X ベア



HELENOX
チェアワン2個セット



つるの剛士
デザイン
Tシャツ 2枚ベア
（モンベル社製ウィックロン素材）



つるの剛士
デザイン
マイクロファイバー
クロス 1枚

※画像はイメージです

つるの剛士×バイク王 親子で楽しむバイクライフ！

#パパツ- の 輪

もっと
広がれ！

忙しくてバイクに乗ることができない子育て世代やその子供達に、「もっとバイクの楽しさに触れられる機会を！」という考えから誕生したパパと楽しむツーリング、略して「#パパツ-」。つるの剛士さんを中心に、この活動はどんどん広がって行きそうな勢いです！

PHOTO:井上 達



「#パパツ-」についての詳しい情報は「Bike Life Lab」にて随時更新中！ >>>>
<https://www.b190.jp/bikelifelab>



<<<< BikeLifeLab公式twitter
<https://twitter.com/bikelifelab>

北斗の拳・前園真聖・つくば博・ドラクエⅢ

コロコロ・浅香 唯・ミニ四駆・ビックリマン・イカ天・高橋名人 etc.

昭和50年男

Born in 1975

2019 November vol.001

Under400 11月号増刊

定価780円

▶総力特集

オレたちの 熱源を探る時間旅行

Golden 5years

1985-1989



LAMBRETTA V200/125/50 Special



今のNIPPONに マッチしたビークル ランブレッタ Vシリーズ

環境問題が厳しくなり、かつ個で動くことの多い昨今、どんなビークルが求められているのか？ ヒストリカルでかつファッショナル。時代に、そして日本という土地柄に合ったさまざまな条件にマッチしているのは…

Special Information

ファッショナルな 乗り物の象徴

ちょっとファッショナルに興味のある人なら、裾の後ろが燕尾状に先割れたオリブグリーンのコートをモッズコートというのを知っているだろう。M51という正式な名称があるんだけど、モッズが好んで着用していたことからモッズコートと呼ばれるようになったアイテムである。そして、そのコートとともにモッズと切っても切り離せないのが彼らが足として使っていたイタリアンスクーターだ。

モッズはもと1950年代後半から60年代にかけてイギリスの若者たちに浸透したカルチャーで、その様相を知りたいのであれば、映画『さらば青春の光 (Quadruphenia)』を観るのが手っ取り早い。ボタンダウンシャツにタイトな三つボタンのスーツの組み合わせは今見てもカッコいいし、スタイルのいちカテゴリーになっているの十分に分る。

日本国内においてモッズシーンが展開されていくのは80年代で、79年に公開された『さらば青春の光』がそのキッカケとなり、その広がり大きく影響していたのが今でも各地で行われ



90年代終盤のスクーターランの様。個性あふれる車体もさることながら2ストロークモデルならではの甲高い排気音と吐き出される白煙もインパクト大だった

提供：1st of ハウス東京事業部

ている。モッズメーダーだ。初開催されたのは81年の東京で、当初はライブイベントのみだったけれど、90年からはオープニングにスクーターランが組み込まれる。渋谷や原宿といった都内の人が集まる場所を、モッズファッショナルに身を包みデコレートしたベスパやランブレッタで走り回るコンテンツで、最盛期は100台近い車両が参加していた。90年は、昭和50年男がちょうど15歳の時。そう、まさに青春真っ盛りの時期が、このスクーターランが盛り上がりつつあった時期と重なるのだ。なので、当時の尖った昭和50年男世代のなかには、モッズシーンに憧れた人もいた。実際には、実際に参加していた人もいたはずだ。

使い勝手のよさが 幅広い用途に対応

さて、ここからは本題であるスクーターについて。ベスパは1946年より絶えることなく生産＆販売が続いているけれど、ランブレッタは70年代初頭でイタリアの本国による生産が途絶えてしまう。その後、インドで生産されたりもしていたけれど、残念ながら欧州や日本で浸透することはなかった。ところが、中古市場において高値で取引さ

れるマニアだけのアイテムになっていた2017年、イタリアの本国が再びランブレッタを手がけたのである。

時代に合わせて2ストロークのミッドエンジンには4ストロークのオートマチックへと変わり、オリジナルのスポーティなカタチはブラッシュアップされ、イタリアで吟味されたうえで世に放たれたのである。古いランブレッタを知る人が一目見てもランブレッタとわかるデザインに対してこれまでさまざまなイベントに展示して得られた感想は、バイクを知る人からも知らない人からも「かわいい」や「おしゃれ」、「カッコいい」と好意的である。

その国産スクーターとは一線を画したスタイリングもさることながら、同じスタイルで用途に合わせて排気量を選べるのもこの新しいランブレッタの魅力といえる。ラインナップされるのは、クルマの免許があれば乗れる50cc、近年その高い利便性から好調な市場動向を見せる125cc、そして高速道路を利用することもできる200ccだ。200をチョイスすれば、ちょっとしたツーリングもラクラクこなしてくれる。また、すでにキャリアやパンパー、スクリー

ンといった豊富なカスタマイズパーツも販売されているので、それらを装備すれば、数日間かけたキャンピングツーリングを楽しむことだって可能だ。

ここで改めて地球環境の保全が世界的に叫ばれ、クルマも排出ガスの規制がどんどん厳しくなっている今という時代を考えると、そんな時代なのに大都市の都市部ではエアコンをガンガンに効かせた大型のセダンやSUVに運転手一人というのがごく当たり前の光景。多くの荷物を運ぶ必要があるならまだしも、ちょっとした用事や通勤に1人以上の車重のある燃費一桁台のクルマを使う必要があるのだろうか？ そのムダに気がついている都会派のミニマリスト昭和50年男は少なくない。そんな彼らにこそ、クルマに比べて断然燃費がよくて環境にもやさしくシート下トランクにそこそここの荷物が入る利便性の高いランブレッタをおススメしたい。ファッショナルアイコンとしての魅力を十分に擁し、路地裏のような細い道にまで入っていくコンパクトな車体は、遊びからビジネスまで幅広いシーンで活躍してくれること間違いなし。まさに今の日本の道路事情に合ったビークルなのだ。

LAMBRETTA V200/125/50 Special Fix / Flex
SPECIFICATIONS ●全長×全幅×全高 1,890×735×1,115 (mm) ●軸間距離 1,340 (mm) ●シート高 770 (mm) ●エンジン型式・排気量 空冷4ストローク 単気筒 168.9cc [104.7hp] [49.5cv] ●最高出力 (RPM) (kW) (PS) 7,500rpm/7.5kW (10.1ps) 8,500rpm/12.8kW (17.4ps) ●最大トルク (RPM) (kgf・m) (N・m) 7,500rpm/9.22 (0.93kgf・m) 7,000rpm/13.4 (1.34kgf・m) ●燃料タンク容量 15.5 (L) ●タイヤサイズ 110/70-12 (F) / 120/70-12 (R) ●価格 46万円 (41万) [39万] ※[125, 110, 50, Fixはフロントフェンダーがボディに固定されたタイプ、Flexはフロントフェンダーが固定されたタイプ]



①サイン・ハウス東京事業部
②03-5721-1770
③https://signhouse.jp/products/lambretta/